

「底が突き抜けた」時代の歩き方 511

次の世界へ「身をもって目撃」し、「参加」していったソntagという隠喩

「サラエヴォでゴドーを待ちながら」のなかで、ソntagは、《サラエヴォの人々は悲惨な生活を送っている。そして、悲惨なのは『ゴドー』も同じだった。ボツツォ役のイネスはどぎついほど演劇的だったし、アトコは私がこれまで見たなかでももっとも悲痛なラッキーだった》と語る。ラッキーのモノログでは、《神の冷淡さと無関心をめぐる、また、心を喪失して硬直化した世界をめぐるベケットのアリアを、あたかも完全にうなずける話として、アトコには語ってもらいたかった。いや、まさにうなずける話だった、とくにサラエヴォでなら。》

ソntag演出の『ゴドー』は、上演されるサラエヴォの地にふさわしいように手を加えられていた。出演者である《彼らの志向、気質、それまでの演劇経験、それに現在の（どん底の）状況からして、サラエヴォの俳優たちがもっとも見事に上演すると思われる『ゴドー』、そして私が演出家として選んだ『ゴドー』は、苦悶とたえようもない悲しみにあふれ、終盤には暴力が台頭した。》悪い知らせを告げる伝令が手荒な仕打ちを受けて、《逃げ去ると、彼らは長い、耐えがたい沈黙に呑みこまれていった。チェーホフさながらの絶対的な悲哀の瞬間だ。『桜の園』の終わり、老僕のフィールスが目覚めて、捨て去られた屋敷に自分だけが取り残されたことを知る場面をほうふつとさせた。》

サラエヴォではソntagが上演しなくとも、戦争以降ずっと、毎日絶えまなくゴドーの現実が上演されていた。『ゴドー』的世界が現出するなかで、人々は住み、生きつづけてきたのである。だからこそ、彼女はあえて『ゴドー』の上演を試みようとしたのだ。

《二回目のサラエヴォ滞在、そして『ゴドー』上演にいたるあいだ、慣れっこになった生活サイクルが繰り返し再生されているような気分にとらわれた。最初の十日間は、市の中心部が封鎖開始以来もっとも激しい砲撃にさらされた（4千近くの砲弾に襲われた日もあった）。再びアメリカの介入への期待が再燃する。しかし、親セルビア派の国連保護軍がクリントンを出し抜く（...）。国連保護軍は、アメリカが介入すれば、国連軍が危険にさらされると主張したのだ。》

そして、サラエヴォ市民のあいだで着実に深まってゆく絶望と不信感。そして見せかけの停戦（つまり、砲撃と狙撃を小規模に減らしても、それで安心した人々がそれまでより多く市中に出かけるため、毎日、以前と変わらぬ人数が殺され、負傷した）。etc、etc。

出演者も私も「クリントンを待ちながら」といったたぐいの軽口をたたくのは避けようとしたが、7月末にはほぼそれに興じてばかりいた。空港の先の近郊にあるイグマン

山をセルビア人勢力がいまにも制圧せんとする時期だった。イグマン山を押さえれば、彼らは市の中心部に向けて水平砲撃を行なうことができる。そこで、セルビア勢の銃撃拠点に対しアメリカが空から攻撃する、あるいは少なくとも武器の禁制が解かれる、との期待が再びもち上がった。失望を恐れるあまり人々は希望を抱くことを躊躇していたが、それでも、再度介入を口にしたクリントンが、再度何もしないで終わってしまうとは、誰にも信じられなかった。》

演劇に関係のない《サラエヴォ市民のあいだで着実に深まってゆく絶望と不信感》のなかで蔓延しているのは、もちろん、ゴドーではなく、「クリントンを待ちながら」の気分だった。戦闘状況としては圧倒的に比較にならない、無防備なサラエヴォ市民に対するセルビア勢の容赦のない攻撃を制止する力を持つのが、唯一アメリカであったなら、サラエヴォ市民はもちろんのこと、サラエヴォに長期に滞在して『ゴドー』上演に取り組んでいるソントグ自身も、失望を恐れて希望を抱かないように努めはするものの、やはり「クリントンを待ちながら」の誘惑を抑えることはむずかしかった。だがクリントンはゴドー同様、やっては来なかった。《ゴドーもクリントンも待ってなんかいるものか、という気になることもあった》が、《待っていたのは小道具だ》った。

スーツケースや弁当用のバスケット、シガレット・ホルダー（パイプの代わり）と鞭などの小道具だけでなく、舞台上で食べる人参はどこで調達すればよいのか。《上演の二日目までは、俳優、助手たち、それにきわめて貴重な裏方たちに食べさせるため、私が毎朝ホリデイ・インの食堂からくすねてくるロールパン（これが朝食だった）のうち三個を代用品にして稽古するしかなかった。》適当な長さのロープや吸入器、つば広帽子やブーツも長いこと見つからず、ソントグがデザインした衣装も、《上演前日まで届かなかった》。サラエヴォではなにもかもが欠乏していたが、《閉鎖された国民劇場には小道具がそろっていい》たにもかかわらず、彼女が《「サラエヴォ演劇界」の客人の身分にすぎなかったばかりか》、演劇の派閥の一つである《ハリス・パソヴィッチと手を組む私が他の人々の親切をあてにするなどもってのほかだった》。このことは、彼女がサラエヴォに滞在するなかでみてきたことの一つだった。

《こんなことは、他のどこでも当たり前のことだ。包囲されたサラエヴォだから、あってはならないことだ、とは言えない。戦争前のサラエヴォの演劇界にも、ヨーロッパのどの町にも見られるのと同じような確執、狭量さ、嫉妬があったにちがいない。だが、助手たちも、セットと衣装のデザイナーであるオグニエンカ・フィンチも、またパソヴィッチ自身も、サラエヴォ市民全員が信頼に値する存在であるわけではないことを、何とか私に察知させまいと必死だった。私が、問題のなかには何らかの敵愾心や妨害の意図からくるものもあると気づき始めたとき、助手の一人が悲しげに言った。「私たちの実像がわかってしまったのでは、もう戻ってきてくれないのでしょうかね」と。》

アメリカからやって来たソントグには知られたくないような出来事が一杯ある町に、

サラエヴォはなってしまうという響きがそこにはあった。パソナヴィッチが「この町がかつてどんなだったか、想像つかないだろうなあ」と言い、「樂園だったんだ」と理想化して呟く時、当然その裏には、しかしいまはどうしようもない町になってしまっているという嘆きがこめられていた。《いまでは、この地の私の知人のほぼ全員が、市民の意欲が萎えてしまったことを嘆いている——強盗や窃盗、ギャング行為、略奪まがいの闇市業者、軍の一部による略奪行為の増加、そして市民の協力精神の欠如。自分を責めることはない、自分たちの町を責めることはない、と言ってあげたい気がする。17カ月にわたってこの町は銃撃戦の舞台と化していたのだ。市役所などというものはあって無きがごとしだ。だから砲撃の残骸は放置され、幼い子供たちの登校も組織化されていない、等々。封鎖された都市は遅かれ早かれ悪行の巣窟となる。》

しかし、この現状をサラエヴォ市民のほとんどは容赦なく弾劾し、ある友人が「ここで何か良いことが起きるなんて、奇蹟だ」と語れば、もう一人は「ここは悪人の町だ」と非難する。イギリス人のフォト・ジャーナリストから寄付された貴重な蠟燭9本も、あっという間に盗まれたし、ミルザの、自家製パン一切れと梨一個の弁当が盗まれたときには、《俳優たちはすっかり落ち込んでしまった》。それでも、「私たちはこの生活をいつまでも続けられる」とか、「この生活、私は百年だって大丈夫よ」と語る、30代後半の者たちもあり、ソントグ《自身、同じような感情を抱くことがときどきあった》。が、彼女がサラエヴォにずっと住みつづける彼らと同等に取り扱えないのは明らかだった。

《「16カ月、お風呂に入っていない」とある中年の婦人が言っていた。「どんな感じかわかりになる？」もちろんわからない。一カ月風呂なしという程度なら、わかる。関わっている作業が突きつけてくる課題、一緒に作業するあらゆる人の勇気と熱意のおかげで、私は意気軒昂にして元気いっぱいだった。ただ、彼ら一人一人にとってそれがいかにかたいへんだったか、またこの町の将来がいかにか絶望的か、それは片時も忘れられなかった。私はこの町を出られるが彼らは出られないという事実は大きな差だったが、その他、彼らに比べれば私の困難や危険など小さなものだとはいえ、それに比較的たやすく耐えられたのは、彼らとともにベケットの芝居に全面的に意識を集中していたおかげだ。》

幕開けの一週間ばかり前までは、《最上級の仕上がりになるとは思えなかった》芝居も、最後の週になると、順調にいき始め、《ベケットの作品に対して恥ずかしくないものになっていると思えた》。『ゴドー』に対する各国のプレスの注目も驚きであり、《俳優陣に余計な邪魔が入って申し訳ないと謝ると、彼らもジャーナリストの見学を歓迎していることがわかった。どうすべきか相談をもちかけた友人たちもすべて、この作品上演の報道は「サラエヴォにとって歓迎すべきことだ」との意見だった。》彼女が作品上演の報道に積極的ではなかったのは、報道されて観客が増加するというメリットはあったものの、作品上演そのことよりも報道そのものが注目されてしまうという、メディアがもたらす倒錯現象を察知していたからだ。

もちろん、ソントグは作品上演の報道について語りながら、戦争報道についての重要な問題点を語っていたのである。《戦争の本質が完全に変わってしまったわけではなく、メディア・イベントとはいってもそれは戦争のたんなる一側面、あるいは主要な一側面にすぎない。だがここで私が問題にしたいのは次のような感覚だ。メディアが取り上げるか否かが注目の第一の対象となっていること、そしてメディアが注目しているという事実そのものがときとしてメインの話題となってしまうこと。》

たとえば、友人のジャーナリストが母親は機銃掃射で殺されたが、頭に重傷を負った5歳の娘は、《脳のスキャニング検査と高度な治療ができるどこかよその病院に空輸しなければ》、助からないことを知って、レポートで取り上げたところ、数日後他のジャーナリストたちも追って「少女イルマ」について、まるでボスニアからの報道を代表するかのよう報道し始め、遂にポイント稼ぎに躍起となっていたイギリスのメイジャー首相が、《少女をロンドンに運ぶべく飛行機を派遣》するという美談が降って湧いた。

ところが、大喜びしていた友人のジャーナリストに対して、《子供の苦しみを利用した「メディア・サーカス」》という攻撃と非難がその後、殺到したのだ。《多くは腕や脚の喪失や麻痺に苦しむ、何千人という子供や大人が、スタッフ不足、物資不足のサラエヴォの病院で悲嘆にくれ、国連のせいで（それはまた別の話だが）外へ運び出してもらうこともできずにいるというのに、たった一人の子供だけに注目するのは道義的に許しがたい》という批判だった。

ソントグはこういう。《それをするのは良いことだった——一人の子供の生命を救おうという努力は何もしないよりは良いことだ。この点は歴然としていたし、事実、その結果、他にも脱出できた人々がいた。だが、サラエヴォの病院の惨状について報道するならまだしも、それは棚上げにされて、プレスがとった行動についての論争のみに話は矮小化されてしまった。》プレスの問題ではなく、戦争の悲惨な現状が問題である筈なのに、どうしてプレスの問題に矮小化されてしまうのか。ここに大きな問題があった。当初、「少女イルマ」の一件が報道されたとき、サラエヴォでは「少女イルマ」の背後に無数の「少女イルマ」が病床に横たわっていることが示唆されつつ、取り上げられたにちがいがなかった。「少女イルマ」だけの問題ではなく、こうした「少女イルマ」が今もセルビア勢に砲撃されて、無数に傷ついている悲惨な戦争の現状がある、という報道姿勢に基づいて放映されたと考えられる。

「少女イルマ」についての報道は、このような悲惨な事態を惹き起こしている戦争を一刻も早く終焉させなくてはならないという訴えを伴っていただろうし、「少女イルマ」の報道を機に世界がボスニア戦争に関心を持ち、注目してほしいという願いがこめられていたにちがいがなかった。いずれであれ、報道側は「少女イルマ」だけの問題として取り上げたつもりはなかった筈だ。ところが、視聴者たちの多くは「少女イルマ」だけに注目した不公正な報道として受けとめ、攻撃し始めたのだ。この指の先に起こっているこ

とを見つめてほしいと願っているのに、「指の先」を見つめたまま憤慨しているといった光景に等しい。一体なにが問題であり、本質的な問題がどうしてすり替わってしまうのか。

もう一度、筋道を辿り直してみよう。「少女イルマ」を取り上げたジャーナリストは、あくまでも重傷を負った悲惨な一人の少女をピックアップして報道した。ここに問題はない。続いて他のジャーナリストたちが後を追って、「少女イルマ」について報道し始めた。ここにも問題はない、とはとてもいえない。なぜなら、後追い記者たちはサラエヴォの他の子供たちの悲惨な現状を取り上げてよかったし、あるいはまた、悪化する一方の戦争被害についてレポートしてもよかったのに、「少女イルマ」の悲惨な現状のみを報道する頹廃を曝け出しつつあったからだ。つまり、カメラ視線が集中することによって、「少女イルマ」は有名人に仕立てられていった。「タマちゃん騒動」と全く同じ現象である。こうなると、有名人の「少女イルマ」に救出の手を差し伸べるのは誰か、という物語が出来上がっていく。そこにイギリスのメイジャー首相が、ホワイトナイトとして登場することになったということだ。

しかし、メイジャー首相は「少女イルマ」の救出に関心を払っただけであって、無数の「少女イルマ」を救出させるボスニア戦争の終結には全く関心を払わなかった。要するに、一人の「少女イルマ」の救出だけに終わってしまい、他の多くの「少女イルマ」は救出されずに、病床に横たわったまま息を引き取っていった。メディアが自らの作りだした美談の行方を追うだけで、自らの報道に対する内省と共に、メイジャー首相のスタンドプレーを批判しなかったとすれば、《子供の苦しみを利用した「メディア・サーカス」と攻撃され》ることになるのは、当然だった。一人の「少女イルマ」を救出することが他の多くの「少女イルマ」の救出に結びつかなかったことが、そして結びつかないような救出のありかたとして予め設定されてしまっているように見え、そのように現に進んだことが問題であったのだ。しかし批判や攻撃もまた、その問題へと向かわなかった。

とはいえ、ソントグがいうように、《一人の子供の生命を救おうという努力は何もしないよりは良いこと》であるのは、歴然としている。同時に、「少女イルマ」の救出が無数の「少女イルマ」の救出につながらないことが問題であるのも、歴然としている。ソントグにそのことがわからぬ筈がない。おそらく彼女からすれば、サラエヴォが置かれている苦境はもはや「ゴドーもクリントンも待つ」望みが絶たれて、一切の出口が閉ざされた円環状況にあった。そんななかで現実に役立たない正当論に用はなかった。正当論を語ってみせるだけなら、誰でもできる。正当論を語るなら、同時にその現実可能な手立ても示して、実行にこぎつけてほしいということだった。全員の「少女イルマ」が死に瀕しているなかで、メディアに注目された一人の「少女イルマ」だけが救出されたとしても、それは「良いこと」ではないか、ということだ。プレスを批判するよりも、批判の目は戦争に向いてほしいと、ソントグは言っていたのである。

ここで想起するのは、ボスニア戦争を終結させるためにNATO軍によるセルビア空

爆が決行されたとき、ソントグがその空爆を支持して、空爆に反対する多くの西欧の知識人から猛反撥され、批判の総攻撃を受けたことである。彼女の支持理由は、《一人の子供の生命を救おうという努力は何もしないよりは良いことだ》というのと同じ論理だったにちがいない。彼女が以前からそんな判断の持ち主だったのかどうかは知らないが、もしサラエヴォ滞在で徹底的に学んだことがあるとすれば、それは生き死にが常に具体的に押し迫っている状況下では、「どちらがマシか」を考えて動くしかないということであったと考えられる。そんな状況下では距離をとった思考はできなくなるし、そんな余裕などなかった。つまり、生き死にに直結した判断と、考えることのできる時間を十分に持った中での判断とが、当然相容れなくなることも起こってくる。

戦争報道が詳細に《外へ伝わりさえすれば、世界は何かをするはずだ、と考えられた》が、《ボスニアのジェノサイドの報道がその幻想に終止符を打った。》なぜか。《世界でも数えるほどしかいない政治的、軍事的決定を下す人々の側に介入の意志がない限り、この戦争ももう一つの遠く離れた災難以上のものにはならない》からだ。しかしこのことは、決定権を持つ側が「介入の意志」を持つようになればよい、ということを示している。『戦争広告代理店』によれば、まさに戦争メディアがアメリカに「介入の意志」を持つように仕向けることによって、NATO軍によるセルビア空爆が実行されたのだ。おそらく戦争メディアが仕掛けなければ、ボスニア戦争は今も続行中であった可能性がある。もちろん、単なるおびただしいだけの戦争報道に戦争を終わらせる力はない。戦争メディアが詐術まがいのキャッチコピーをつくりだすことによって戦争イメージを固定化し、アメリカ等のトップが世界の平和と安全のために、「介入の意志」を持つようになっていく内幕が『戦争広告代理店』には詳しく記述されていた。

《テレビを批判する人々がよく言う標準的な主張は、小さな画面で見る恐ろしい出来事は、現実感を促すと同時に、見ている人をますますその事態から遠ざけていく、というものだが、私はそれを信じない。戦争を終わらせる行動がないのに、戦争について絶え間ない知らせが流れてくる。これこそが私たちがたんなる観客の立場に追いやるのだ。テレビではなく、政治家たちこそ、歴史を番組の再放送であるかのように見せている張本人なのだ。同じ出しものを見ていれば飽きもする。テレビで見る戦争に非現実感がただようとすれば、そのあまりの恐ろしさにもかかわらず、それが明らかに停止させるすべさえない事態だからだ。》

テレビに映しだされる戦争の恐ろしい残酷さに促されて、視聴者が戦争反対に結集し、政府を動かす力になりうるかといえ、否と応えざるをえない。残酷シーンがいくら酷いからといって、視聴者は条件反射的に行動に駆り立てられるものではない。それは戦争の背後にある国際情勢が複雑であるということもあるが、なによりも戦争報道を受けとめる各視聴者が営んでいる生活総体において、戦争報道が受けとめられなくなっているからである。戦争報道の衝撃は長続きはしない。所詮見るだけに終始し、考えるきつ

かけには至らない。テレビは我々を《たんなる観客の立場に追いやる》けれども、我々もまた、テレビに対してだけでなく、あらゆる問題に対して自らを「観客の立場」に追いやっているのだ。当事者感覚を喪失していく「観客の立場」が、我々を現実に向かわせることはなく、ますます非現実感で覆われていくことになるのは避けられない。

《サラエヴォの人々でさえ、ときどき戦争が非現実的に感じられると言う。彼らは、和らぐことのない衝撃状態に身を置いており、それが言葉でも、不信感をともなって表われてくる（「何でこんなことが起こるの？ まだ本当のこととは信じられない」）。セルビア勢の暴虐と、みずからが余儀なくされている生活の不毛さと、不慣れな思いに、彼ら自身ただただ驚愕している。「私たちは中世に生きている」と誰かが言った。「サイエンス・フィクションよ」と言う人もいた。

サラエヴォにいるあいだ、非現実感にとらわれたことがあるかと質問される。サラエヴォに行くようになってから——この冬も、ナダのラネーフスカヤ婦人とヴェリボルの口パーヒンで『桜の園』を上演するため、また行くつもりだ——私にはそこは世界でもっとも現実的な場所に思える、というのが真実だ。》

もちろん、テレビの前の「観客の立場」に追いやられている我々の非現実感と、サラエヴォの人々が味わっている非現実感とは全く異なる。「観客の立場」ではなく、戦争の惨禍を一方的に被る当事者として渦中に放り込まれているにもかかわらず、サラエヴォの人々が非現実感にとらわれるのは、これまでサラエヴォで幸せに暮らしてきたのに、いきなり戦争状態に巻き込まれてしまったことの不条理がどうしても納得できないし、受け入れられないからだと考えられる。現実が剥きだされてくる濃厚さに何の準備もなく直面させられると、人々は却って非現実感にとらわれてしまうのかもしれない。「観客の立場」としての非現実感とはそれ自体であるが、当事者としての非現実感とは現実の残酷な切り換えに頭がまだ充分対応しえないこととの感覚の表出であろう。だからソントグは、サラエヴォの人々が非現実感にとらわれるほど、《そこは世界でもっとも現実的な場所に思える》と答えざるをえなかったのだ。

『ゴドーを待ちながら』は12本の蠟燭を舞台に置いて、8月17日に開幕した。その日は二公演で、開演は午後2時と4時、サラエヴォにはマティネーしかない。暗くなってから外出する人はほとんどいない。満員で多くの人が入れなかった。最初の二、三公演、私は不安で身を硬くしていた。だが、ある瞬間、三回目の公演だったと思うが、リラックスし始めた。初めて、観客として見ることができた。イネスが紙粘土のニワトリをむさぼり食う場面で、自分とアトコを結びつけているロープをたゆませはしないか、ヴラジミールの3を演じるセヨが放尿するために急いで退場する寸前に、左右に重心を交互に移し、しばらくもじもじする仕草を忘れはしないか——もはや心配はやめた。芝居はもう俳優たちのもので、杞憂は無用だ。その回の公演の最終場面だったか——8月18日水曜日午後2時——ゴドーさんが、今日は来られないけれど、あしたは必ず行くからっ

て、との伝令の言葉に続くヴラジーミルとエストラゴンの長い悲劇的な沈黙のさなか、私の両眼が涙でちくちくし始めた。ヴェリボルも泣いていた。観客席は静まりかえっていた。聞こえるのは、劇場の外の音のみだった——街路を轟進する国連軍の車両、そして狙撃の爆音。》

ソntagの『ゴドー』上演に関する文章は、このような公演模様の記述を最後に結ばれているが、NATO軍によるユーゴスラヴィア空爆が行われたのは、『ゴドー』上演二年後の95年である。サラエヴォの人々を大きく勇気づけたにちがいない『ゴドー』上演に、ソntag自身も大きく勇気づけられただろうが、本当のところ彼女にとって『ゴドー』上演とは何であったのか。彼女は『ゴドー』上演を通じてサラエヴォで一体なにを見、体験してきたのか。彼女は何を求めて、「火中の栗」を拾いに行ったのか。彼女はサラエヴォの俳優たちと共に『ゴドー』を上演することによって、文化的な楽しみを次々と奪われているサラエヴォの人々を励ましたかった、それ以上のものではけっしてありえなかっただろうことは想像できる。そしてそこになにかを見出そうとしてきた。

ソntagがサラエヴォでの『ゴドー』の上演から掘み取ってきたもの、あるいは、徹底的に痛感させられてきたことについては、大江健三郎との往復書簡(99.6.16-17付朝日夕刊)のなかで次のように述べていることから、垣間見られるにちがいない。《広島・長崎の意味について書き始めたときのあなたがそうだったはずですが、私も立場を表明することは自分の義務だと感じたのです。サラエヴォが包囲されていた何年間にも、そこで自分を役立てる方法を探ることが義務でした。

それでいて同時に、どう申しましょうか、意見をもつことはたやすい、安易すぎる、という自覚がありました。たとえ正しい意見でもそうです。

論争的となっている意見を支持すれば、支持者はいやおうなく有名になり目立ちます。たとえそれがその行為の目的でなくとも。

私がずいぶん前に自分に課したことがあります。自分がそれまで知らなかったり、この目で見たことがなかったりする事柄については、けっしてどんな立場もとってはならないと。ヴェトナムでの戦争については68年と73年にそこへ行っているので語ることができます。サラエヴォでもほぼ三年間にわたり相当の時間を過ごしました。アルバニアにも最近二度滞在しました。

善意があっても思慮深くとも、直接の体験の具体性にとって代わることはけっしてできません。リアルなものの衝撃。私たちはフィクションの作家としてこのことを知っているのではないでしょう。

身をもって目撃すること、参加すること。この問題を出したわけを言いましょう。旧ユーゴスラヴィアにもアルバニアにも行ったことがなく、その地の人々の歴史や地理もまったく見当もつかない人々が、バルカン半島において10年も続いた恐ろしい事態をめぐり立場をとる。その多くがあまりにも私の予想どおりの立場だったことに自分でも

ショックを受けたのです。どんな戦争地帯にも一度も近づいたことがなく、戦闘に与したり、爆撃のもとで生活したりするとはどんなことかこれっぽっちの考えもない。それがみえみえのアメリカやヨーロッパの知識人たちが尊大にもあの戦争について語るのを目にして、怒りを禁じえません。

真剣であること。(中略) 真剣であるということは責任をとるということです。でも、独善的にならずに正しくあるにはどうすべきか。どうすれば「私」を放棄できるか。何であれ、自分はこのことなら知っているとの判断は、この「私」をとおして得るものではあるのですが(シモーヌ・ヴェイユは、「私たち」よりひどい唯一のもの、それは「私」だ……と語りました)》

ソntagは、《私も立場を表明することは自分の義務だと感じた》と述べる一方で、《自分がそれまで知らなかったり、この目で見たことがなかったりする事柄については、けっしてどんな立場もとってはならない》ことを自分に課しているということであれば、自分の「立場を表明する」ためには、つねに現場に赴かなくてはならないということになってしまう。彼女は、そうだと答える。《旧ユーゴスラヴィアにもアルバニアにも行ったことがなく、その地の人々の歴史や地理もまったく見当もつかない人々が、バルカン半島において10年も続いた恐ろしい事態をめぐる立場をとる》ことができるなどと考えること自体が、どうかしてはいないかということだ。その立場が正しいかどうかにあるのではない。言葉を発することによってどんな立場もとれると思っていることに、つまり、立場をとるとは言葉を発しさえすればよいのだと考えていることに、彼女は衝突しようとしているのだ。

正しい意見であろうとなかろうと、《意見をもつことはたやすい、安易すぎる》とソntagが言うとき、言葉でどうやって戦争現場に触れることができるのか、という怒りが彼女には渦巻いていた。おそらく彼女は、「存在と言語」にかかわる問題を提出しているとみられる。《意見をもつことはたやすい、安易すぎる》ということは、存在と切り離された次元での言葉は存在の不自由に対して、いつでも自由であるけれども、責任を負うことはできないということである。《真剣であるということは責任をとるということです》と彼女は述べるが、言葉でもって人は《真剣であること》はできないということだ。つまり、《真剣であること》は、存在の次元においてしかありえないのである。

ソntagは「存在」という言葉を一つも用いていないが、《立場を表明すること》は言葉の次元にはなく、存在の次元に突き入ってこそ可能であることがみえてくる。《サラエヴォが包囲されていた何年間にも、そこで自分を役立てる方法を探ることが義務だった》ということは、サラエヴォで存在することなしにはありえないということであった。「存在する」ことについてはもっと的確に、《自分がそれまで知らなかったり、この目で見たことがなかったりする事柄については、けっしてどんな立場もとってはならない》といういいかたであらわされている。ただ単に「知る」だけのことでなければ、

「見る」だけのことでない。「存在する」ことにおいて「知る」ことであり、「見る」ことなのだ。逆のいいかたをすれば、「存在する」ことにおいてしか知りえないようなことを「知る」、見えてこないようなことを「見る」ということであろう。

《ヴェトナムでの戦争については68年と73年にそこへ行っているので語ることができます。サラエヴォでもほぼ三年間にわたり相当の時間を過ごしました。アルバニアにも最近二度滞在しました。》だから、ヴェトナムについて、サラエヴォについて、アルバニアについて語る資格は自分にはあるが、それらの地に一步も足を踏み入れたことのない者たちは語る資格がない、と言っているわけではけっしてない。そう誤解したい人は言語の世界からあらゆることがみえたり、触れたりできるのを信仰していることを表明しているだけだ。ソntagはヴェトナムの戦場に足を踏み入れることによって、見たことについて語ることができると言っているのである。サラエヴォで『ゴドー』を上演したことも、サラエヴォに存在していたことを物語っており、存在する度合いでしか『ゴドー』の上演はありえないということであった。

《善意があっても思慮深くとも、直接の体験の具体性にとって代わることはけっしてできません》と言うことによって、そこに存在する、現実の裂け目に身を差し込んで存在する、ということに取って代わることのできるものはない、ということを示しているようにみえる。そう、存在するというとき、どこに、どのような状態のなかで存在するのか、が問われているのだ。いいかえると、存在するに値する場所であるかどうかはわからないが、存在しなければならぬ場所に存在することが、「直接の体験の具体性」という言葉に凝縮されているように思われる。足を踏み入れた場所にいるだけのことが体験になってしまうのは、そこがもし運が悪ければ飛んできた砲弾や銃弾によって負傷したり、命が吹っ飛んでしまう戦闘地域であるからだ。したがって、「直接の体験の具体性」とは、殺されることもありうる死と隣り合わせになった「直接の体験の具体性」にほかならない。つまり、死に接することによって「直接の体験」が不可能になってしまうかもしれない、ギリギリの瀬戸際での「直接の体験の具体性」ということだ。

死ほどリアルなものはありえないが故の、死に直面していることの「リアルなものの衝撃」のなかに住みつづけることが、《身をもって目撃すること、参加すること》といういいかたで語られている。《身をもって目撃すること》であり、身をもって《参加すること》は、やはり存在たりえていること以外のなにものでもないだろう。《目撃すること、参加すること》の代償を自らの身で引き受けていくこと、そのことにおいて「直接の体験の具体性」がよりリアルに際立ってくるといえよう。おそらくここでのソntagはもしフィクションの作家としてであるなら、作家であるためには作家であることが最大に脅かされる場所をもたなくてはならない、と言っているように聞こえる。作家としてなにかを発言しようとするなら、そのためにも発言が向かおうとしている場所を抱え込む、あるいは、その場所にかかわらずには発言自体が成立しないというふうに響く。

発言される言葉は身をも携えていく、いいかえると、発言することそのことよりも、発言によって身が運ばれていくことのほうがはるかに重要であり、作家であるということとは発言する者ではなく、自らの発言によって自らの身が運ばれていく者のことではないのか。《どんな戦争地帯にも一度も近づいたことがなく、戦闘に与したり、爆撃のもとで生活したりするとはどんなことかこれっぽっちの考えもない》癖に、《アメリカやヨーロッパの知識人たちが尊大にもあの戦争について語る》、なにかを語っているように振舞える、頹廃した状況にソングは怒りを募らせているのだ。彼らのような知識人たちがいくら爆撃を被っているサラエヴォの人々の味方を装う言辞を重ねようとも、彼らの発言はその地の人々にどんな意味としても届かない以上に、むしろ戦闘状況に許容されていることにおいて、砲撃に等しい言葉としての役割を負ってしまっていると捉えることができる。

作家たちは想像力を武器として、言葉をたえず発しようとする。想像力を駆使すれば、どの場所にも、どのような遠い人々の悲惨な過酷な生活にも入っていくことができるかのように、彼らは思い込んでいる。しかし、バルカン半島に一度も行ったこともなく、《戦闘に与したり、爆撃のもとで生活したりする》ことの体験の皆無な者が、どのような想像を働かせながら、ボスニア戦争をめぐる発言したり、立場をとることができるのだろう。ソングが、《自分がそれまで知らなかったり、この目で見たことがなかったりする事柄については、けっしてどんな立場もとってはならない》と言うとき、彼女は想像を絶する、あるいは想像力がけっして及ばない、いや、想像力を行使することで済ませてしまってはならないことが世界には膨大に溢れ返っており、そのような《事柄については、けっしてどんな立場もとってはならない》と語っていたのだ。

したがって、《善意があっても思慮深くとも、直接の体験の具体性にとって代わることはけっしてでき》ないということは、想像力は《直接の体験の具体性にとって代わることはけっしてでき》ないということでもあった。ソングは想像力に基づいて発言したり、立場をとることの怠惰を批判していたのだ。むしろ想像力の行使は、「直接の体験の具体性」に立ってなされなくてはならないのではないか。「直接の体験の具体性」に基づかない想像力とは、単なる妄想ではないのか。そんな声をソングから聞き取ることでもあるだろう。《身をもって目撃すること、参加すること》、そして想像することであった。このことは、《真剣であること》だった。《真剣であるということは責任をとるということ》であり、「責任を取る」ことにおいて真剣であったのだ。しかも彼女は、独善的であってはならないと自らを戒める。「直接の体験の具体性」は、人を独善的に陥れやすくするからだ。つまり、自分自身をますます「私」へと集中させてしまいがちであり、それ故に、《「私」を放棄できる》、いいかえれば、「私」から解放される度合いで、《身をもって目撃すること、参加すること》が深められなくてはならないのだ。

2005年11月10日記

